



TIEPh

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy

TIEPh



Newsletter No. 09 2010. 1

「エコ・フィロソフィ」を求めた4年間を終えるにあたって

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ (TIEPh)

竹村 牧男



地球環境問題への哲学的なアプローチの一つに、「環境倫理学」がある。この環境倫理学では、人格なき自然存在も自己の生存権を主張できるのか、現在、存在していない他者である未来の人々に我々は責任を負うとどうしていえるのか、といった問題が議論されている。そこに何らかの論理的な正しさを見出そうとするのが、倫理学という学問のようである。

私は、未来の見知らぬ他者のために今、行動しようと思う動機となるのは、その他者の苦悩への想像力ではないかと思う。他者が困窮し苦悩する姿がリアルに感じられ、共に苦しむ時、何かせすにはいられなくなるのではないだろうか。そのように、共苦・共感こそが、倫理の基盤になりえると思うのである。それは「知の倫理」ではなく、「情の倫理」というべきか。

しかし、その思いが一過性に終わらないためには、根本的に、自己と他者や自然との時間的・空間的関係を、知的にも明瞭に了解することが大事である。自己という存在のあり方を、一個の身心としての自我だけで完結しているとするのではなく、身心と環境との総体として見るのがまず重要である。しかもその身心と環境との総体としての自己は、同じくそうした総体としてのあらゆる他者と、時間的・空間的に無限の関係を結んでおり、その中でこの今・このかけがえのないのちは生かされているという認識があれば、見知らぬ他者への共感をどこまでも深めることであろう。その意味で、自己という存在のあり方の哲学的究明もまた、今、深く求められていると思うのである。

その自己を深く掘り下げ、自他の関係性を深く掘り下げている思想の一つに、ノルウエーの哲学者、アルネ・ネスの説いたディープ・エコロジーがあった。それは仏教などの東洋思想にも非常に共通するものがあるものである。それら自己の掘り下げが世界の掘り下げになるような東西のエコロジー思想、環境哲学を尋ねていくことは、サステナビリティの実現という課題に大きくかかわってしよう。

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブでは、そうした哲学や、さらにサステナビリティに関するアジア民衆の意識調査、環境改善に関わる具体的なシステム・デザイン等の研究を、この4年間、積み重ねてきた。毎年、公開講演会やシンポジウム等を開催し、年度末には『エコ・フィロソフィ研究』を発行して、研究成果を各界に発信してきた。このプロジェクト自体は、本年度で終了するが、その成果のすべてをまとめた報告書も作成することにしている。来年度以降も、これまでの成果の蓄積をもとに、さらなる研究の展開をぜひ実現したいと思う。この4年間の活動によって形成された研究拠点を、なんらかの形で維持していきたいと念願しているところである。

最後に、これまでご指導・ご鞭撻くださり、またご協力・ご支援くださった、IR3S関係者をはじめとする多くの方々に、心より御礼申し上げる次第である。

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ (TIEPh) は、自然観探究ユニット・価値意識調査ユニット・環境デザインユニットから構成され、さまざまな研究活動、シンポジウム、研究会を企画・運営しています。

今回のニュースレターでは、2009 年度の活動報告、及び活動予定を掲載します。詳細につきましては、TIEPh ホームページ (<http://tieph.toyo.ac.jp/home.html>) をご参照ください。

第 1 ユニット ICAS/TIEPh 共催国際セミナー報告

西村 玲

2009 年 10 月 10 日 (土)、東洋大学において、ICAS/TIEPh 国際セミナー「持続可能な発展と自然、人間——西洋と東洋の対話から新しいエコ・フィロソフィを求めて——」を開催した。このセミナーは ICAS と TIEPh の共催で行われてきたもので、今年で第 4 回目となった。

はじめに、基調講演として、日本大学の小坂国継先生に「サステナビリティと環境倫理学」という題目で講演していただいた。その中で小坂先生は、環境問題を解決するためには、自然科学・社会科学・環境倫理学などの多方面からのアプローチが、それぞれ単独ではなく、相互に密接して連携するときに、最も効果的な問題解決を期待できると解説された。持続可能な社会を目指すためには、自然・環境の破壊をもたらすような人間の価値観を改め、まずは個人が意識的に公平性や倫理観について、健全な自覚をすることが不可欠であると結論された。

続いて研究発表が行われた。ICAS からは中川光弘先生、Jeffrey・Clark 先生、続いて上柿崇英先生、TIEPh からは竹村牧男研究員と稲垣諭研究員が発表され、最後に、サングラハ教育・心理研究所の岡野守也先生が、それぞれ環境倫理に関する学際的な研究とその展開状況、環境問題解決のための提言を行った。その後、本日のセミナーを巡って、総合討論が行われ、フロアからも様々な意見が飛び出し、活況を呈しつつセミナーは幕を下ろした。

セミナー全体を振り返ると、それぞれの研究発表に共通して見られるのが、環境倫理の重要性はもちろん、その教育についても実践的な取り組みをすべきであるという点であり、教育と啓蒙の方向が示され、これからの方向性が明らかになったと思われる。今回のセミナーを踏まえて、今後の ICAS と TIEPh の活動がますます盛んになっていくことが期待される。

第 2 ユニット 浙江大学訪問記 (2009 年 9 月)

大島 尚

浙江大学 (Zhejiang University) は、中国浙江省の省都、杭州 (Hangzhou) にある総合大学で、1897 年に設立された中国で最も歴史のある大学の一つです。1952 年に政府の方針で全国の大学再編が行われた際に、多くの大学に分かれたのだそうですが、1998 年に浙江大学、杭州大学、浙江農業大学、浙江医科大学の 4 大学が合併して現在の浙江大学となりました。中国国内の大学ランキングでは、清華大学、北京大学に次いで第 3 位の座を保っています。

私たち TIEPh 第 2 ユニットのメンバーが浙江大学を訪問したのは、2007 年 3 月に続いて今回が 2 回目でした。訪問先は心理学部で、鄭全全教授を中心とする社会心理学関係の研究者との情報交換が目的です。今回は、こちらからの要望で大学院生の研究発表を聞かせてもらいました。実は、日本を出発する際に飛行機が遅れたため、大学院生とのワークショップの開始は予定より大幅に遅れて夜の 9 時半頃になってしまいました。それでも、多くの院生たちが待っていてくれて、1 時間以上にわたって 4 人の発表を聞くとともに意見交換を行うことができました (写真①)。興味深かったのは、どの研究も実験や調査のデータに基づく実証的な方法を用いているのですが、必ず研究成果の現実場面への応用を語っていたことです。日本と違い、心理学の分野でも産業や学校教育の現場と大学の研究とが密接に結びついていることを知りました。

翌日の午前中に、今後の組織としての協力体制について教授たちと打合せを行いました。近いうちに何らかの協定を結んで、継続的に研究協力を行っていければと考えています。打合せの後に、キャンパスを案内していただきました。心理

学部があるのは旧杭州大学の西溪キャンパスですが、そこから少し離れたところに広大な紫金港キャンパスがありました（写真②）。敷地面積 518 ヘクタールに 39,000 人の学生が学ぶという恵まれた環境に、中国第 3 位の大学ならではの力の入れようを実感しました。



①鄭全全教授（中央）と大学院生たち



②紫金港キャンパス

第3ユニット 国際シンポジウム報告「環境哲学の可能性」

山口 一郎

2009年9月19日、環境問題の解決にむけて、環境哲学がいなかる関わりをもちうるか、という課題設定のもとに国際シンポジウムが開催された。ドイツから、G. シュテンガー氏、M.グートマン氏が招聘され、まず、環境概念の哲学による理解、生物多様性の価値論という、環境問題をどのように理論的に把握すべきかその方法論的考察が展開された。それに対して、丸山徳次氏が環境問題の原点としての水俣病公害問題解決にあたっての、日本の社会制度に関連した諸困難を呈示し、桑子敏雄氏は、環境問題の解決に当たり、社会的合意形成のプロジェクト・マネージメントとしての哲学者の役割を果たしてきた氏自身の経験を語り、その際の具体的問題点を指摘し、河本英夫研究員は、日本社会のシステム論的考察を展開する中で、日本社会の特質を浮き彫りにし、環境デザインの提示する問題解決方向を呈示した。

総合討論にあたって、同じく、環境問題の解決にあたる中で、日本とドイツの社会全体という背景を通してみえてくる制度上の組織化の違いが少しずつ鮮明になってきた。そもそもドイツと日本における哲学という学問の果たす役割は、その社会における哲学の関与の仕方という面で相違がみられる。ドイツにおいて、哲学は、政治や経済、法律等、社会制度の背景として、個々人の生活の基盤として、政治的決断の背後に、いわば、常識として働いているのに対して、日本において、個々人の生きることの自覚としての哲学が、個々人の自己の生活に対して、第三者的な距離をもって客観視するという態度が浸透していないことから、いまだ構築の途上にあることが窺われる。人と人との間柄の一基軸である二人称的な人間関係が強調されすぎることから、客観的な法的規定による成文化と透明化の努力が、途上段階にあるといえるのであろう。このような現実を踏まえ、日本社会を土台にした哲学の構築とその進展にともなう、環境哲学の構築が火急の課題とされることが明らかにされた。

TIEPh 事務局から

国際シンポジウム「日本発のエコ・フィロソフィを求めて」

2009年11月28日（土）読売新聞東京本社、ならびに東洋大学共生思想研究センター後援で、国際シンポジウム「日本発のエコ・フィロソフィを求めて」が東洋大学井上円了ホールにて行われました。昨年文化勲章を受賞された本学学術顧問のドナルド・キーン先生と、日本学研究に関する先生方、ウィリアム・ラフルーア先生、フレデリック・ジラルル先生、竹内整一先生にお越しいただき、そして本イニシアティブの吉田公平研究員とで、シンポジウムが開催されました。

日本古来の自然観についてさまざまな提言がなされ、活発な議論が行われました。まずキーン先生からご講演をいただき、自然の美しさを日本人が思いだすことで、自然との共生を目指すエコ・フィロソフィが実現するのではないかとお話をいただきました。続くシンポジウムでは、各パネリストの討論があり、その討論は、人間の心の問題と科学技術の課題を考えるために、自然へ還帰するという道を具体的に模索していく必要があるのではないかという、本イニシアティブの竹村牧男研究員の提言でシンポジウムは締めくくられました。

当日は多くのお客様にご来場いただき、大盛況のうちに幕を下ろすことができました。



研究助手：新任挨拶



2009年10月1日から、東洋大学エコ・フィロソフィ学際研究イニシアティブの研究助手になりました西村玲です。日本思想史・仏教思想を専門としています。環境哲学の分野において仏教思想は、欧米におけるこれまでのキリスト教的な自然観に代わる自然観や死生観を提供しうるものとして注目されており、主にアメリカで研究が進みつつあります。ここでご縁をいただいたのをきっかけに、仏教思想を新たな視点から見直すことができればと思います。なにとぞよろしくお願い申し上げます。

<2009年度 TIEPh 活動報告>

4月～7月

「全学総合」講義として、「エコ・フィロソフィ入門」を開講

5月8日

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ

2009年度講演会

「サステナビリティの教育について ―オーストラリアの現状から―

講師：ジュリー・マシューズ

5月16日

2009年度 TIEPh 学内ワークショップ

テーマ「環境デザイン」

質問者：武内和彦

9月12日～13日

第1ユニット：日本宗教学会パネル参加

「宗教とエコ・フィロソフィ」

於：京都大学

9月19日

TIEPh 国際シンポジウム

「環境哲学の可能性～環境問題の解決に向けて～」

於：東洋大学 白山キャンパス 6号館 6309教室

10月10日

ICAS/TIEPh 共催 国際セミナー

「持続可能な発展と自然・人間 ―西洋と東洋の対話から
新しいエコ・フィロソフィを求めて―

於：東洋大学 白山キャンパス スカイホール

11月28日

TIEPh 国際シンポジウム

「日本発のエコ・フィロソフィを求めて」

後援：読売新聞東京本社 東洋大学共生思想研究センター

於：東洋大学 白山キャンパス 井上円了ホール

<今後の活動予定>

1月25日

『「エコ・フィロソフィ」入門

―サステナブルな知と行為の創出―

ノンブル社より刊行予定

2月

『「エコ・フィロソフィ」研究』Vol.4 刊行予定

『「エコ・フィロソフィ」研究』Vol.4 別冊 刊行予定

今後の活動の詳細は、随時 HP (<http://tieph.toyo.ac.jp/>) でアップします。

ニュースレター第9号 平成22年1月発行

編集 東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ (TIEPh)

住所：東京都文京区白山5丁目28-20 6号館4F 60458室

Tel & Fax : 03-3945-7534

E-mail : ml.tieph-office@ml.toyonet.toyo.ac.jp

Homepage : <http://tieph.toyo.ac.jp/>